

「米沢織と、ともに歩んで」

(特別寄稿)

株式会社新田

代表取締役社長 新田 英行 氏



社長の新田英行氏、お会いしている間、終始笑顔でのご対応を頂きました。

米沢は、自然に恵まれた土地で四季のうつろい、最上川の源流の地であり織物に適した町です。米沢織は産地産業として二〇〇年の伝統を受け継ぎ現在に至っております。その発展の要因として

一、米沢地方は今でも県下随一の豪雪地帯といわれ気候が寒冷で雪が深く、屋内の作業を選ばなければなりませんでした。  
……………「天の時を得た」

二、米沢地方は古くから織物の原料としての青芋(麻)があり、後年は養蚕の適地として蚕糸業が盛んとなり紅花などの原料が豊富でありました。  
……………「地の利を得た」

三、興産の名君といわれた鷹山公の創始以来、常に新しい技術と新しい商品に積極性と根気をもせた米沢人の気質。  
……………「人の和を得た」

などが調和して今日までその伝統を引き継いでいます。

そこまでに至った歴史は、慶長三年、上杉氏が越後より会津一〇万石に移されました。関が原の戦後上杉氏は、米沢三十万石に減らされてしまいました。上杉景勝公の側近の直江兼統は藩の収益をあげる為、換金植物だった青芋と紅花栽培に力を入れました。

兼統伝「四季農戒書」には農民の心得があり、「紅花畑のある家では、花摘みに励む事、紅花の出来の良い時は朝早く起き、女、子供まで総出で働く様に。紅花の出来が悪いのは、女房がお茶ばかりしてその家の嫁や子供までもだらしないものと考えて差し支えない」とまで記されています。

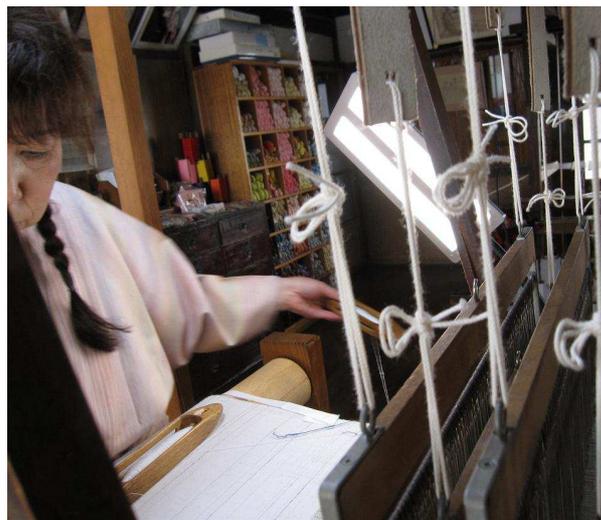
明治十七年春、弊社が創業し、新田家初代は袴地一筋に製造しました。

紅花は、明治にアニリン染料(合成染料)が輸入され、紅花染は衰退してしましました。しかしながら研究を重ね昭和三十八年に紅花染は復活致しました。現在は伝統の能の袴、そして紅花染紬を両輪として物づくりをやっております。

米沢青芋は、上質青芋の若取りの選芋として蔵芋といわれ課税され別格でした。それらは主に、奈良方面へ旅だし(出荷)されておりました。

そして上杉鷹山公、明和四年(一七六七)秋月家より米沢に養子に來られ、上杉十代藩主となり藩政立て直しの為の一つとして養蚕に力を入れました。前文で記した直江公伝来の青芋があり、鷹山公は付加価値をつける為、たて糸に絹糸、よこ糸を青芋にして、横麻袴地を開発しました、糸織の誕生です。これが大好評を得て次々に新製品を出し、これが絹織物産地形態を成すに至ります。

そして明治政府は、廢藩置県をして藩士が士族となりました。明治十年、政府は「金禄債券」を発行し米沢の士族はそれを売り、手織機を買いました。人呼んで公債機といいました。そして六百件以上の機屋が誕生したと言われております。



伝統工芸と有機EL照明との融合化



会社基本理念は、「物づくりを通じて歴史文化伝統を継承し、全ての人に喜び、やすらぎ、幸せを提供する会社を目指します。」

伝統工芸とは、伝統と革新の連続という事で伝統を柔軟な発想と洗練された手法、感性を持ち、先人の築き上げた米沢織をこれからも発展させていきたいと思っております。

↑ 豊かな色合いの紅花染の彩り

← わが社の紅花摘み風景

## 『私とMOT』シリーズ編

MOT五期生 インテグリス・ジャパン株式会社 佐藤 雅彦 氏



会社デスクでの佐藤雅彦さん

一体どうなってしまうんだろう。会社はいつまで持ちこたえられるのだろうか。2008年9月15日米国で起ったリーマン・ブラザーズの破綻に端を発した世界金融危機(リーマンショック)の最中、急激に悪化してゆく業績、予想すら出来なかったほどにまで下落した会社の株価を前に苦悩する日々が続いていました。MOTの一期生でもある現在の上司よりMOTへの入学を改めて勧められたのはこのような時でした。

MOTへの入学勧奨の話はこれ以前にもありましたが、大学を卒業して20数年が経つてはいましたが、関心が無かったわけではありません。家内もその歳でまた専門機関で勉強できる機会なんてそうない、良いチャンスだから是非行くべきだと言ってくれていました。

このような会社や家庭の後押しがあっても、仕事上も私生活でも最も充実しかつ忙しい時期に、仕事と学業・研究の両立は出来ないのでは無いか、この間会社や部下に迷惑をかけてしまうのではないかとこの思いからなかなか踏み切れませんでした。

しかし、加速する市場のアジアシフトやアジア勢を始めとした新たな競合の参入、さらにはマレーシア工場を中心とした社内間の競争を戦っている中で瀕した経済危機、このままでは今の職場を後の世代に残せないという思い、更には、状況が厳しい中、強く後押しをしてくださった上司の後ろ盾で入学を思い立ちました。

また、世界俯瞰の匠プログラムのもと新設されたグローバル戦略コースの内容が、日々直面しているテーマに直接結びつくのではということもありました。

私の勤務する会社は、アメリカ合衆国マサチューセッツ州に本社を置き、半導体、フラットパネルディスプレイ、ハードディスクドライブなどのハイテク分野で使用される材料を精製・保護、搬送する製品・サービスの提供を事業とし、米国、フランス、ドイツ、マレーシア、シンガポール、台湾、中国、韓国、イスラエル、日本と世界10か国に製造工場、サービスセンター、研究施設を構えるグローバル企業で、米沢の工場は1981年の創業以来、グループの主力工場の一つとして稼働を続けておりませんでした。

アジア地区の経済・文化生活レベルの向上と需要比率が増加する中、親会社は米国の製造および開発拠点のアジア地区への移管を進めており、もう一つのアジアでの製造・開発拠点として事業拡張が進んでいるマレーシア工場は米沢工場の地位の確保という意味では脅威となってきました。さらに、今後は台湾、中国と云った国々でのアウトソーシングを含めた製造事業の拡大も視野に入っており、これが当社米沢工場や協力関係にある地域企業にとっても更なる脅威となってくることは必至です。

そこで、MOTでは日本の製造拠点である米沢事業所がグローバルに展開している当社の開発・製造拠点の中でどのような役割を占めるべきかを見極め、そのゴールを親会社に宣言し活動を行ってゆくことこそが、当社全体の継続的成長を考える上で重要であり、米沢事業所の存在価値がグループ内で認められることに繋がるという考えにもとづき、米沢事業所が日本の製造業が最も得意とするものづくり技術力を中心として当社の成長に寄与し、グローバル競争で成功するための要因について研究しました。

グローバルコース戦略コース第一期生は4名でのスタートでした。わずか4名ですが、そのメンバー構成といえは年齢はもとより、金融、地元メディア、製造業とバラエティーに富んでおりました。その中で、ものづくりの理論や技法といった技術経営理論のみならず、商法や海外商取引、知的財産戦略といったグローバルビジネスを行う上で無くてはならない理論や手法を巧みに組み合わせシラバスを構築された小野先生のお力により有意義な学習・研究を行うことができました。

また、このバラエティー豊かなメンバー構成により、ともすれば製造業の常識として深く掘り下げもなかった課題も、他業種の方からの別の視点での

質問を受けることにより、今まで常識と思っていたことを改めて俯瞰したり、異なる観点から診ればこういう考えもあるのだということに気付きました。これが、グローバルコースのシラバスの効果と合わせ、私にとつての2年間でより有意義なものにしてくれたように感じます。更に幸運なことは2年目の秋のベトナム視察。仕事から海外へ赴く機会はありませんが、大学院の視察ということで、地元政府、JETRO現地事務所、日本からの進出企業等々との面談や見学を通じ、普段の業務では考えられないような経験をすることができ、その後の研究や業務に大いに役立てることができました。関係各署との調整にお骨折りをいただいた小野先生はじめ諸先生・職員の方々には改めて感謝申し上げます。

2年間の講義や研究を通じ、日本がアジア諸国と同じ土俵に自ら身を投じるのではなく、その競争力の源を生かしたポジションで国際競争に臨むことこそが、その存在感を示す上で重要であることはもとより、グローバル事業展開をしている企業グループの成長にも繋がるのが改めて判りました。

現在も市場のアジアシフトはその勢いが止まらず、またアジアとの競争も厳しさを増しています。MOTで学んだことを少しでも業務に生かし、後進に真の働き甲斐のある職場を残すべく微力ながら取り組んでまいりたいと考えております。



グローバル会議を主導する佐藤雅彦氏

《山形大学大学院理工学研究科》

MOT専攻「価値創成コース」新設

平成25年4月より、ものづくり技術経営学専攻(MOT)のコースとカリキュラムが変わりました。これまでの、「ものづくり」コース、「世界俯瞰の匠」コース、「食品創製」コースを再編して「価値創成コース」が新設されました。このことによりMOT専攻は、新設の「価値創成コース」と留学生対象のコースである「とうほくMITRAIコース」の2コース制になります。

入学者のテーマや学習課題に応じ、グローバル系科目、イノベーション系科目、地域活性観光系科目から履修科目を選択できます。

- ・「公開講座科目の積極的な展開」一般の社会人・市民を対象にした「公開講座」を実施
- ・「社会人・留学生・日本人学生のハイブリット教育」従来からの3群の学生による混合型講義を更に強化し、国際性を身につけ、多文化共生の理解を深め、実質的なコミュニケーション能力を育成。(パンフより抜粋)

《地域再生人材創出拠点の形成》

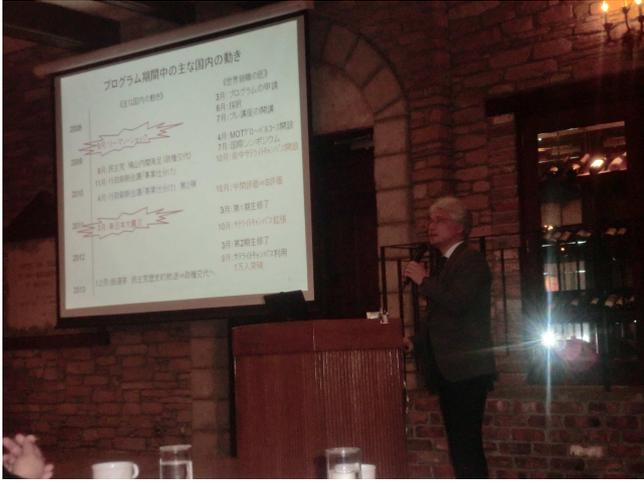
「世界俯瞰の匠」育成プログラム成果発表会

ものづくり技術経営学専攻(MOT)「世界俯瞰の匠」コースの5年間を総括する、育成プログラム成果発表会が平成24年12月19日(水)に開催されました。事業採択者の文科省をはじめとして、山形県、米沢市、大学関係者、企業等から大勢の参加がありました。

・挨拶 山形大学工学部学部長 飯塚博氏  
 ・山形県置賜総合支庁支庁長 菅原好見氏  
 「基調講演」  
 21世紀の「グローバルものづくり」の構築  
 ～生産性信仰を超えて～  
 講師 日本総合研究所調査部 藻谷浩介氏  
 「事業説明」  
 世界俯瞰の匠育成プログラムの5年間を振り返って  
 発表者 山形大学大学院理工学研究科 教授 小野浩幸氏  
 「修了生・在校生発表」  
 ・一期生3名、二期生1名、三期生4名  
 「閉会挨拶」  
 山形大学大学院ものづくり技術経営学専攻長 兒玉直樹氏



御挨拶される飯塚工学部学部長



「世界俯瞰の匠」の成果発表をされる小野浩幸教授

「修了生・在校生発表内容」

- 《一期生》
  - ・佐藤雅彦氏(本紙記事、私とMOT参照)
  - ・渡辺裕氏(県内中小製造業で海外投資46社を対象に成長要因分析と海外展開スタンスを類型化)
  - ・蹄茂美氏(国際競争激化の中で地域の産業人材育成の課題と今後の方向性調査研究)
- 《二期生》
  - ・佐藤春樹氏(米沢地域の繊維産業を対象に、北イタリヤのコモ地域との比較検証から課題・将来戦略を考察)
- 《三期生》
  - ・広川勝氏(中小プラスチック切削加工業の事業戦略に関する研究)
  - ・歌丸和明氏(県内中小製造業の海外展開に対する意識調査)
  - ・櫻井宏樹氏(効果的な産学金連携のための企業評価方法についての考察)
  - ・富田康男氏(メコン地域進出におけるフイージビリティスタディの研究)

「コーヒーブレイクで、  
 こんにちは！」

小野浩幸教授から、「世界俯瞰の匠」育成プログラムの5年間の経緯をお聞きしましたが、平成21年4月開講の前年にブレ講座「地域再生システム論」を開講されたころのことを思い出しました。

このグローバル戦略コースの課題の認識について、非常に新鮮な印象で受け止めることが出来ました。それが大勢の優秀な人材の輩出に繋がったと感じております。また街中サテライトのオープンや、海外での戦略実践演習の実行等々、次々と新しい施策を打ち出され、魅力ある地域に定着する5年間を創出されたと感じております。

山形大学理工学研究科  
 ものづくり技術経営学専攻2年 黄茵雪さん いつも明るい笑顔の黄さん ⇒

家族想いのやさしい女性黄さんは、中学生の時、お父様が山形大学工学部に留学されていたため、一年間米沢に滞在。その時の人々の親しみやすさや美しい景色に惹かれて、日本に留学する決意をされたそうです。

日本の礼儀作法や小説にも通じていらして、お料理も得意、学業もしっかりとこなすバランスを感じさせてくれる魅力的な女性です。留学生の良さを生かし、家庭と仕事をこの地で両立されたいそうです。とても楽しみです。

《インタビュー：黒田三佳編集委員》



# 「MOT広場」 今回は「グリーン・テック研究会」のご紹介です。

## グリーン・テック研究会の活動について

昨年、平成24年4月に「グリーン・テック研究会」が発足致しました。山形大学と(財)山形県産業技術振興機構が、地域の資産(研究シーズ・製造技術)を有効に活用し新たな産業の芽や産学官の繋がりを育てることを目的に、素材とその加工・製造技術を共に考える連携の場として設立。

・研究会代表：飯塚博工学部長  
 ・副代表：齊藤真幸振興部長  
 この度、具体的な推進策となる「勉強会の設置報告会」が開催されました。

・日時 平成25年3月14日(木)13:00  
 ・場所 山形大学工学部百周年記念会館  
 ・挨拶 山形大学工学部長 飯塚博氏  
 ・基調講演  
 ・プラスティック精密成形加工の現状と今後の展開

機能高分子工学 伊藤 浩志 教授  
 今回の勉強会の立ち上げまでの経緯とその内容について、産学官連携コーディネーターの小関 昇氏から説明が行われました。その後、5グループからなる勉強会の代表から、それぞれの紹介がありました



飯塚工学部長(研究会代表)の御挨拶



グリーンテック研究会の会場風景

- ①「生体・医療ニライフサイエンスの高分子材料勉強会」新しい分野への取組紹介  
 バイオ化学工学 田中 賢 教授
- ②「複合材料・プラスティック勉強会」高度加工新材料を生かした事業化事例  
 機能高分子工学 西岡 昭博 准教授
- ③「無機・金属ファイバー勉強会」素材の高機能化に活かせる添加物質  
 バイオ化学工学 木俣 光正 准教授
- ④「ソフトマテリアル・グリーン勉強会」面白い材料を使って行う産学連携事業化  
 バイオ化学工学 野々村 美宗 准教授
- ⑤「エネルギー活用研究会」グリーン分野とエネルギーの有効活用  
 機械システム工学 鹿野 一郎 准教授

(聴講生所感)  
 古代の材料の主役は土器や銅鐸などに見られるように土や青銅でした。中世から近世までは鉄が主役となり、産業発展に寄ります。二十世紀半ばからは、石油系資源の登場により、石油が燃料と製品のシェアを圧倒します。今世紀はその基礎研究深化と応用2極の高度化により、高機能有機材料が主役として加速成長する期待を今回は改めて学んだ思いでした。

## グローバル化の時代に求められる国際人材シンポジウム 平成25年5月15日(水)15.00～ 懇親会17.30～ 「激変・激動する国際競争時代を勝ち抜くための人材の確保と育成」もっとみらいコンソーシアム総会第四回 於：山形大学工学部100周年記念会館

(第一部)開会挨拶：山形大学工学部工学部長 飯塚 博 氏 とうほくMITRAIコース長 高橋 幸司 氏  
 講演①「とうほくMITRAIコースの現況と今後の展開」 山形大学工学部理工学研究科准教授 野田 博幸 氏  
 ②「地域に貢献する山形大学の国際教育」 山形大学工学部理工学研究科准教授 仁科 浩美 氏  
 ③「日本語講師として海外赴任から感じること」 日本語学校講師 野村 研三 氏  
 ④「とうほくMITRAIコース在校生・修了生発表」  
 閉会挨拶：山形大学工学部理工学研究科教授 兒玉 直樹 氏 (第二部)懇親会：於2Fカフェ吾妻

### 《編集後記》

学位記授与式も無事に済み、大勢の卒業生の皆さんが夢と希望を抱きながら飛び立ってゆきました。そして、いつの間にか路肩の雪も消えはじめ、また春の足音が聞こえてきます。桜の開花を前に、新年度を迎えてMOT専攻コースも、「価値創成コース」と留学生対象の「とうほくMITRAIコース」に再編され、新たな出発となります。

NHKアナウンサー三宅民夫さんが、「言葉のちから」を出版されました。その中で、寡黙で、ぶきつちよ、アガリ症の自分を克服して掴んだ仕事の要諦は、「伝わるように伝える」ことでした。新田さんの紅花染めの歴史や佐藤さんのグローバル成長戦略報告は同様、時代と社会への貴重な体現メッセージであると感じさせられました。

本通信も今回14号目を数えます。Y-MOTネットワークのチカラを、地元から世界へ発信することを目標にして、この集いをより楽しく強く、わくわくする大人の言葉を伝えましょう。皆様の御活躍をお祈りすると共に、今後も寄稿へのご協力を宜しく御願ひ申し上げます。  
 <編集委員一同>

### 《MOT事務局便り》

MOT事務局より、大学の動きやMOT専攻に関わる情報を御知らせ致します。  
 平成24年度学位記授与式が3月20日に行われ、当専攻科から前期課程12名、後期課程3名の方が卒業されました。  
 平成25年4月入学者は7名の方です。楊軼群さん、蔣志香さん、チャン・タイチュンさん、佐藤駿介さん、武藤隼人さん、市川弘道さん、遊佐正行さん、李澤桐さんです。  
 MOT事務局体制も一部変更となりましたが、従来の場所で開催しております。是非一度おたちより下さい。  
 MOT事務局